

「約束は雪の朝食」再考

——茶の湯との関連から——

石 塚 修

はじめに

井原西鶴の武家物の第二作『武家義理物語』（貞享五・一六八八年正月刊）巻三の二が「約束は雪の朝食」である。現在も京都に残る詩仙堂の主であり、寛永期を代表する文化人としても知られる石川丈山をめぐる逸話を中心としている章である。そしてその評価は、たとえば江本裕氏によれば「それ／＼の武士の心、義理に殉ずる精神の美しさを描きえて大きな感銘を与える咄」とされ、¹ おおむね高く評価されている。その具体的内容を紹介すると次のとおりである。「賀茂山に隠した丈山坊は俗性歴々のむかしを忘れ。詩歌に氣を移し。其徳あらはるゝ道者」であり、そのため「心にかなふ友」もないままに暮らしていた。そこに「有時小栗なにがしといへる人」が「是もへつらふ世を見限。かたちを替て。」尋ねてくる。（この「有時」は後に「神無月八日」であることがわかる。）小栗は「東武にてしたしく語りしゆかしさに。」丈山の草庵へとやってきたのである。二人が清談に時を過ごしていると、この「客」、小栗はふと立ち上がり、「備前の岡山に行事有」と帰ろうとする。丈山も「今宵は是にと留も」しない。そして、「勝手次第と別れさまに。『又いつ比か京帰り』と聞ば『命あらば。霜月のすへに』といふ。『然らば廿七日は我心ざしの日なれば。是にて一飯かならず』と約束して。立行ぬ」と、二人は「朝

飯」を共にする約束を交わす。そのうえ丈山は小栗との別れを惜しみ、「しる谷越」までひそかに見送りをする。それを知った「小栗なにがし」は、「都に友もあまたなれど。心ざしは其方ならではあらじ」と感激し、互いに「立ちながら暇乞して別れ」るのである。そして、その再会の様子は次のようになる。

其後備前に着きし。たよりもなく。日数ふりて。十一月廿六日の夜降し大雪に。篋扱^{くわく}べき道もなければ。まだ人顔の見えぬ曙^{あけぼの}に。丈山竹箒を手づからに。心はありて心なくも。白雪に跡付て。踏石のみゆるまでとおもふ折ふし。外面の笹戸を音信^{おとづれ}し。嵐の松かなと聞耳立るに正しく人声すれば。明わたる今小栗なにがしたづねきたるに。其さま破紙子ひとつまへ門に入りより編笠ぬぎて。たがひの無事を語りあひ。しはらくありて。「此たびは寒空に何としてのぼり給ふぞ」といへば。「そなたはわすれ給ふか。霜月廿七日の一飯たべにまかりし。」「それよく」と俄に木葉焼付。柚味噌ばかりの膳を出せば。喰仕廻て。其箸も下に置あへず。「又春までは備前に居て。西行が詠め残せし。瀬戸のあけぼの唐琴の夕暮。昼寝も京よりは心よし」とて。取いそぎてくだりぬ。「扱は此人日外^{いっせ}かりそめに申かはせし言葉をたがへず。今朝の一飯喰ばかりに。はるく備前より京までのぼられけるよ」と。むかしは武士の実有心底を感じられし²。

やや長くなったが、この部分は本稿の検証に深く関わるので原文のまま引用した。

まず、この章の典拠を扱った先行論文は、『西鶴事典』⁴によれば、これまでに四編ほどある。古くは、南方熊楠氏の『『武家義理物語』私註』が挙げられている。南方氏は、『後漢書』卷一一「范式伝」の范式、巨卿と汝南の張劭、元伯との逸話を紹介し「この談に倣うて作つたらしい」とし、また、三国呉の卓恕の「人と相知約するに、暴風疾雨といえどもかならず至る」という類話をも紹介し典拠として指摘している。そして、丈山が小栗を滑谷越えまで見送ったことに似た話としては、晋の郭奕、大業が羊祐を送り官を解かれたという『古今圖書集成』交誼典七八の話を「ちよいと似た談」として指摘している。また、笠井清氏は、『西鶴の剪燈新話系説話』

のなかで、この南方氏の説を受けて「その後この説を肯定しておられる方もあるが、私は両者を具に比較した結果、舊友との約束を守って訪問する話の筋は相似ていても、結局影響関係は見いだされず、偶然の一致としか考えられなかったのである。」と反論している。さらに、早川光三郎氏は「西鶴文学と中国説話」において「○武家義理物語 約束は雪の朝飯（蒙求の范張鶏黍）」と「典拠」を示している。金井寅之助氏も「『約束は雪の朝飯』の背景」において、この章についての詳しく検討を加えている。その結果、金井氏はその話の素材を『漢書』「范式伝」ではなく、『蒙求』の「范張鶏黍」の注によって得たとしている。そして、小栗のモデルには、「池田家履歴略記」正保元年の条の「牧野將監遁世」に登場する備前岡山池田家臣牧野將監を「彷彿せしめるやうに思われる」と想定している。さらに滑谷越えの地理的な齟齬をも指摘し、検討を加えている。田中邦夫氏は「武家義理物語」にあらわれた西鶴の町人思考⁸において「本話の原拠」として『円機活法』師友門の「期ノ如クニシテ至ル」と「鶏黍ノ約 子猷戴ヲ訪フ」の二つの項目を挙げ、「この二つの典拠を丈山と小栗の交友に重ね合したのではなからうかと思われるのである」との指摘をしている。この四編以外には、笠井清氏に先の論文を受けた「詩仙堂の文芸―西鶴の『約束は雪の朝飯』を中心に―」という論文があり、氏はここで詩仙堂をめぐる文芸を漢詩文・俳諧も含めて詳説している。また、市川光彦氏も、「西鶴のなかの丈山―西鶴における自由とその周辺、第二」¹⁰のなかで、「約束は雪の朝飯」の丈山像の描かれ方について詳しく論じられている。

以上が、これまでの「約束は雪の朝飯」をめぐる先行研究の概要である。一覧してみるとわかるように、そのほとんどは「典拠」の探求に終始している。そして、「典拠」を求めることによって、この章の話の「創作」の部分の解明し、そこから、この章の「読み」を検討しようとしているといえる。しかし、『後漢書』や『蒙求』の范張と元伯の逸話を「典拠」とすることによる、この章の「読み」は、はたして新たな「読み」を生み出しているといえるだろうか。もちろんこれまでの典拠の指摘と検討は全面的に否定することはできない。だが、その指摘にすぎって、この章を「読んだ」としているために、かえって「読み落とし」ている部分はないのだろうか。¹¹ 本稿は、これまでの「典拠」とは別の新たな資料を用いて、この「約束は雪の朝飯」に「読み」を加えることが

できるかどうかを検討しようとするものである。

1 「典拠」の問題点

先に示した先行研究の「典拠」の指摘を見てみると、たとえば、南方熊楠氏は「この巨卿・元伯の談に倣うて作つたらしい」といった指摘にとどまっていたり、早川光三郎氏も「尚管見によれば次の説話も括弧内の如き典拠が指摘されておる」と述べているにとどまっている。そのためここでは、詳細に「典拠」との比較検討をしている金井寅之助氏と田中邦夫氏の論考を再検討することで、「約束は雪の朝食」でこれまで見落とされてきた問題点を明確にしていくことにする。

まず、金井寅之助氏は、上田秋成の『雨月物語』「菊花の契り」の原拠とされる『古今小説』にも「巨卿・元伯」の逸話「范巨卿鶏黍死生交」が載っており、書誌的問題も含めて、もし「この『范巨卿鶏黍死生交』に素材を得てゐるとすれば、西鶴の『死生交』に対する皮肉は、あまりにも強烈すぎる」としている。さらに『後漢書』「范式伝」についても「西鶴は『死生交』は読めなくとも、和刻本のある『後漢書』「范式伝」は読むことがあつたかも知れない」としつつ、「章題『約束は雪の朝食』は「鶏黍」の語による聯想から生まれたと見てよく、『後漢書』「范式伝」にはその語は出ない」としている。そのうえでこの話の典拠は、『蒙求』の諸本中の天和三年（一六八三）十一月刊の毛利貞斎の『冠解蒙求標題大綱鈔』の「范張鶏黍」の注によるとの指摘をしている。

やや長くはなるが、金井氏の指摘した部分をここに引用してみる。（書き下し文の漢字仮名遣いについてはわかりやすくした部分もある。）

○范張ハ後漢ノ代ノ山陽郡ノ范式ト。汝南郡ノ張劭ト也。范式少キ時大學寮ニ入テ學問スル比。張劭ト学友タリ。二人共ニ師ニ暇ヲ請。各々故郷ニ帰ル。范式別レニ臨テ。張劭ニ向テ。二年過テ後ニ。学校ニ還ラン。

其節貴殿ノ家へ尋ネ。尊親ニ見ヘ。子息ニモ逢ハント云テ。互ニ来ル時ノ日限ヲ剋テ別レヌ。其後兼テ定メシ期ニ至テ。張劭母ニ白テ。鷄ヲ調ヘ范式カ来ルヲ候ントス。母聞テ。二年ノ久キ別レ。且千里ノ遠ヲ隔タル者。約束ヲ堅クスルト云トモ難定汝信ズルコト慥ナルハ如何ント云。式承テ。サレハ張劭ハ信ヲ守テ。常ニ不乖者ト言ス。然ラハ用意セントテ。酒ヲ調ヘ候。不更約日来リテ。酒宴ヲシ飲ヲ極テ別ル。▲按ニ此事迹後漢書ニ。二人カ伝を載テ如此。鷄黍事不記。古注蒙求ニハ彼ヲ饗応為ニ。鷄ヲ殺シ。黍ヲ炊テ。来ルヲ待トアリ。又春別京師暮秋ニ往ント約シテ。九月十五日ニ来ルト記ス。本伝ト違。

このように指摘したうえで、金井寅之助氏は、

『蒙求』は啓蒙書として、『後漢書』『范式伝』の怪異のない前半をとりあげ、約束を守る友情の美談とする。『死生交』は大衆読物として、『范式伝』の怪異のある後日談もとりいれ、更に新しい怪異を挙行して二人を自殺させしめ、同じく約束を守る友情の美談とする。西鶴の「約束は雪の朝飯」と『蒙求』の「范張鷄黍」とを比較する時、『死生交』との場合ほど強烈ではないにせよ、さういふものを美談とすることに對する鋭い皮肉を感じざるをえない。

と結論づけている。

田中邦夫氏は、

『円機活法』師友門
「懷友」

① 如期而來

後漢

范式字ハ巨卿。

少ニシテ遊ニフ大学ニ。

……②鷄黍ノ約

見ヘタリ前ノ如クニシテ期ノ而至レルノ下ニ。范

巨卿與張元伯千里ヲ相約ス。殺鶏ヲ為シテ黍ヲ以テ尽平生之歎。子猷訪戴 見ヘタリ下ノ雪夜ニ乗ル舟ニ之下ニ 月
夜ニ訪フ友ヲ ① 雪夜乗舟 〔晋〕 王子猷居ル山陰ニ。大雪ノ夜因テ詠ジテ招隱ノ詩ヲ、忽チ憶フ戴逵ヲ。逵時ニ在リ剡県ニ。
便チ雪夜ニ詔リテ之ニ造リテ門ヲ而返ル。或ヒト問フ之ヲ對ヘテ白ハク、乗ジテ興ニ而來タリ、興尽テ而返ル。
〔賓客〕

② 掃雪迎賓 唐ノ王寶好ニム賓客ヲ。遇レトキハ 雪ニ則チ掃キ雪ヲ以テ迎ヘテ賓客ヲ宴ス之ヲ。謂フ之ヲ煖寒ト。

の部分を描し、

本話の表題「約束は雪の朝食」は『円機活法』に載る「鶏黍約」という表現を踏まえて作られていると考えられる。また、本話の結尾で、小栗が「かりそめに申かはせし言葉をたがえず」、雪山を登って丈山に会いに来た行為を、「武士の実心底」と記しているのも「鶏黍約」で、范式が約束を違えず、千里の隔たりを遠しとせず張劭に会いに来た故事を踏まえた行文であろうと思われる。本話では「鶏黍約」の「信」を武士の義理の「約諾の尊重」に関する話に仕立てているのである。……しかし、「殺鶏為黍」という表現それ自体は、心を尽くした饗応を意味し、「信」とは直接結びつかない。……このように『円機活法』に載る「鶏黍約」はイの系統の話に較べて、「信」の強調がないこと、特に「尽平生之歎」といった表現を持つていることに、西鶴が興味を引かれたのではないかと思われる。

……西鶴は「尽平生之歎」という表現の中に、「子猷訪戴」に描かれた隠士の交友との同一性を感じて、この二つの典拠を丈山と小栗の交友に重ね合したのではなからうかと思われるのである。

と述べている。そして、この章を『円機活法』の「三話を典拠として、丈山と小栗の隠者的交友を描いた話である」と結論づけているのである。

これら両氏の指摘した典拠は、「約束は雪の朝飯」のあらすじと比較したとき、その骨子において類似しているということは否定できない。しかし、細部にわたって比較してみると、どうも不自然な部分が出てくる。そして、それらの矛盾については、両氏とも認めているのである。

『後漢書』「范式伝」に端を発する逸話が、互いの友情による信頼の深さを描いていることはいうまでもあるまい。ところが、「約束は雪の朝飯」の方では、小栗は約束を違えることなくはるばる備前からやってきたのに、丈山はその約束をすっかり忘れてしまっているように描かれている。この点について、金井氏は、

……丈山は、或は小栗も、逢ひたければ来り、用あれば去る。己の情意の動くままに行動する。些々たることの然諾を、生命をかけて守らうなどしない。丈山は、小栗に、然諾を重んずる武士の義理固さの、遁世の境界にあつても、残つてゐることに、感心する。義理固さだけに感心するのではなくて、その気質の残つてゐることに感心するのである。

然諾を重んじ、意地を通し、卑怯を恥づることは、武士にあつては、もつとも大切であつた。それがなければ、敵を倒さねばならない武士の本領は失はれ、ひいては一城一国の運命にかかはる。一般社会においても、然諾は大切であつた。経済をはじめ諸々の社会生活は、それがなければ、成り立たない。しかし、人間そのものにあつて、約束とは何であるのか。無常の世において、はかない人間が、約束することは、身のほどを知らないふるまひといふべきではないか。武士や一般社会において、些々たることにまで、然諾の尊重を、あまりにも強調することに対する、『蒙求』に触発されての、西鶴の反撥と見られたくはない。西鶴の現実批評であり、新解釈であるといつてよいであらう。

と述べて、その理由を説明している。また、田中氏というと、

本話の真のテーマである丈山と小栗の交友には、作者西鶴の、身分制度に生きる町人階級としての本能的願望が色濃く投影されていると考えられるのである。当時の町人は、為政者である武士階級からは、武士の義理を犯すべからざる人倫として、町人も手本とすべき道徳として強要されもさらには町人としての「分」や「礼節」を守ることを要求されている。このような時代にあつて、本話が「武士の実」（義理）を約束や礼儀（＝義理）に縛られず、自分の興にのみ従つて行動する隠者的交友に求めていることの意味は次のように考えうるであらう。すなわち、本話には、人倫の道を体現している（ことになっている）武士の姿を借りて、西鶴の町人としての願望——身分制度に縛りつけている道徳的拘束から自由でありたいという願望——が投影していると考えられるのである。このように考えるならば、本話に描かれた「美談」は、西鶴の願望の中にのみ存在する町人の理想的人間関係の作品化といふべきものであることが知られるのである。

と解説している。

先に示した『武家義理物語』の本文と、これら両氏の見解を比較したとき、先の矛盾にたいする答えとして、私には首肯できかねる。また、源了圓氏の言うように「信頼にたいする呼応としての義理」であり、「いやいやながらするといふのではなく、こころの通つた友人間のごく自然な行為だった」ならば、¹²こうした約束の不履行が起きてよいものなのだろうか。さらに、笠井清氏も、この部分について、「この短い言葉の中に、世を捨てて閑居幽棲すること年久しく、この世の仏事も約束も忘れて飄飄たる丈山と武門を去つて日浅く、行動的で義理がたい小栗の律儀さが対照的に描き出されて」いる部分だと述べるにとどまっているが、私はその「読み」では、「約束は雪の朝食」の持つこの矛盾の「読み」は解決していないように思う。では、その矛盾を解決してくれるような「読み」を導く新しい要素は、はたしてあるのだろうか。そのことを考えるうえで、市川光彦氏の「けだしこうした不備破綻と思しき面にこそ、むしろ西鶴の作家主体が顔を出している」とする指摘は示唆深い。¹⁴そのことを確認するためにも、今一度、『武家義理物語』の本文に立ちかえつてみよう。

此客何となく風斗立ちて、「我は備前の岡山に行事有」といふ。「今宵は是に」と留めもせず。勝手次第と別れさまに。「又いつ比か京帰り」と聞ば「命あらば。霜月のすへに」といふ。「然らば廿七日は我心ざしの日なれば。是にて一飯かならず」と約束して。立行ぬ。

というように、丈山と小栗の二人は再会の約束を交わしている。そしてこの時、丈山の側から「然らば廿七日は我心ざしの日なれば。是にて一飯かならず」と言い出しているわけである。にもかかわらず、当日になって丈山がその約束をすっかり忘れてしまっていたことについて、どう考えるべきなのだろう。この部分と典拠として指摘される『蒙求』の話の展開とこの部分の展開の差異についても、私は先の金井氏や田中氏の説明では不十分であると思う。いかに遁世の隠者とはいえ、本人が「心ざしの日」とまで言っている以上、その日に丈山は何らかの仏事の準備をしなくてはならなかったはずである。とするならば、この約束の失念は、金井氏の「己の情意の動くままに行動する」という指摘や、田中氏の『武士の実』（義理）を約束や礼儀（＝義理）に縛られず、自分の興にのみ従って行動する隠者の交友に求めていることの意味」といった指摘とは、むしろ結びつかないように思われる。そして、この丈山の約束への姿勢こそ、典拠とされる范式的逸話とも話の展開を大きく異にしている点なのである。遁世者であり、悠々自適に暮らしている丈山が、わざわざ仏事を営む日ということは、本人が忘れようとしても忘れられない日であったにちがいない。しかも、その日を当人がわざわざ指定しておきながら、その約束をすっかり忘れてしまっている。そのことを、「己の情意」や「自分の興」に任せての行為としてのみ片づけてしまうのは、やや無理があろう。ならば丈山の病理的現象だったのだろうか。この矛盾を解くためには、

「此たびは寒空に何としてのぼり給ふぞ」といへば、「そなたは忘れ給ふか。霜月廿七日の一飯たべにまかりし。」「それよ／＼」と、俄に木の葉焼付、袖味噌ばかりの膳を出せば、喰仕廻て、其箸も下に置あへず、

という丈山のこの「朝飯」をめぐるもてなしぶりを、詳しく検討する必要があると考える。

2 丈山と茶の湯

そもそも、この章が「丈山坊」こと石川丈山の逸話として書かれていることに注目せねばなるまい。石川丈山の略歴については、上野洋三氏のとめを借りれば、

石川丈山（一五八三—一六七二）、名は重之、また凹、通称は嘉右衛門、のちに左近。号は丈山の他に、大拙・烏鱗子・東溪処士・山木山材・凹凸・六六山人・四明山人・藪里翁・三足老人など。

石川家は、曾祖父嘉右衛門尉信治が松平清康（家康の祖父）に仕えて以来、三河国和泉郷（現在愛知県安城市和泉町）を領地として松平（徳川）家に仕えた。

という経歴である。さらに詳しく見れば、丈山は信定の長男として生まれ、父の没した慶長三年（一五九八）に十六才で家康の「近習」となった。また、元和元年（一六一五）、三十三才の時、大坂夏の陣において軍令に背いたとして、陣後、閉門蟄居して剃髪して妙心寺に入ったとする。のち元和九年（一六二三）から寛永十三年（一六三六）まで広島浅野家に禄二千石で仕え、老母の死後帰京し、相国寺付近に住んだとする。寛永十四年の朝鮮使節との詩文の応酬で名を知らしめ「日東の李杜」と評された。寛永十八年、五十九才で、一乗村に凹凸窠（詩仙堂）を営み、死ぬまでの三十年間をこの地で過ごした。承応二年（一六五二）七十才の時、故郷和泉郷への退隱を希望したが許されなかった。その際板倉重宗に贈ったのが、「約束は雪の朝飯」冒頭にも引かれている「わたらじな瀬見の小河の浅くとも老の波そふかげもはづかし」の歌である¹⁵。その文業は『覆醬集』（寛文十一年・一六七二）『新編覆醬集』（延宝四年・一六七六）にまとめられている。また、より詳細な伝記考証としては小川

武彦氏の『石川丈山年譜 本編』がある。¹⁶

さて、こうした丈山の実像と「約束は雪の朝飯」の先に示した部分を比較してみると、この章では、かなりいい加減な人間として丈山は描かれていることになる。いかに隠遁者とはいえ、自分から「かならず」と約諾したことを当日になってまったく失念してしまっているということは、「人倫」などと大上段にふりかざさずとも、最低限の「人の在り方」としても問題があるといえる。しかも、丈山ほどの人物を実名で示しておきながら、そのような行動をとる、いい加減な人物として殊更に描いていることには、違和感も感じられる。とくに、谷脇理史氏が指摘するように「武家階層を作品に登場させる場合には相応の注意を払っているようにも見うけられる」¹⁷西鶴が、名指しで登場させたからには、何らかの理由を考えなくてはなるまい。では、丈山には事実として、こうした逸話があったのだろうか。または、丈山ならばそうした行動をとりかねないという社会的な認識も当時広く存在していたのであるうか。そのため、作者も、この設定を見せられた当時の読者たちも、そこに違和感を感じることなく受け容れられたのであろうか。しかし、小川武彦氏の『石川丈山年譜 本編』によれば、寛文三年（一六六三）八月八日付けのおそらく石川子復にあてたとと思われる「覺」があり、そこには「一、戯言にも偽を申し候はぬ様に偏に正直を第一に嗜可申事」と書かれているという。¹⁸この時丈山は八十一才である。また、八十才で後水尾院に隷書の大字を献じたとの記録もあるという。これらからも、丈山は九十才で亡くなるまで、いたって心身共に健在であったと推測できる。このように史実と比較すると、「小栗」との逸話を事実であったとし、その原因を老人特有の「物忘れ」に求めることは、どうも無理のようである。では、丈山の「超俗」の姿勢を示している言動なのか。これも、俗世にのみ「正直」を求め、自らはそれを超越した世界に悠々と暮らすということはありえないことではない。だが、どうも丈山は隠逸の生活にあって人も人としての最低の道徳は守ろうとしていたようである。そのことは、現在も詩仙堂に残っているという寛文三年十二月十五日の落款のある「福縁寿」の三幅対に、「福分を踰ゆることなく事を求めて、財を費やさずして陰徳を積む者は自ら福を得る」¹⁹といった文言を書き残していることから窺える。また、やや時代は下るが、寛政十年（一七九八）刊の三熊花顛・伴

高蹊による『続近世畸人伝』でも「翁為人剛直にして勇有り。其穎敏なるも亦人に過絶す」²⁰とあることから、伝承にせよ丈山に病理的「物忘れ」の姿を読みとることは難しいようである。さらに、先に示した部分は、矢野公和氏が言語面から、「日常の会話」であつても武士らしく「格調高い文章で記されている」部分として指摘している。²¹そのことから、どうやら「超俗」による丈山の発言とするのは難しいようである。

では、作者が『武家義理物語』を創作していくうえで、わざと設定した言動なのであろうか。「義理」すなわち「約束」という言葉の持つある側面を強調するため、丈山に平気で約束を忘れさせるように設定したのだろうか。そのことについて検討するため、他の章を「約束の遂行」という点から再度検討してみることにする。

一の一「我物ゆへに裸川」では青砥藤綱が滑川に銭を落として人足に探させたという逸話を元に、その人足の中の一人が見つかつたと詐称した話になっている。その詐称した人足の言葉が「左衛門程世にかしこき者を。偽りすましける」である。やがて、その噂は藤綱の耳に入り、九十七日もの間、本当の銭が見つかるまで探させられるはめになるのである。

一の二「癩子はむかしの面影」は明智光秀の嫁取りの逸話である。ここでも「あねの見よげなれば。十一の年よりいひかはして。身体極りて。是をむかへる約束。」をしたものの、七年後に嫁入りをさせようとすると、瘡のために姉は容貌が変わつてしまい、妹を身代わりにするという話である。ここで明智は、「たとへむかしの形はなくとも。是非におくらせ給へ。」と約束の遂行を求めている。

一の三「衆道の友よぶ衛の香炉」でも、桜井五郎吉の遺言を受けた樋口村之介が、代わつて衆道の契りを交わすという約束を果たす。

一の四「神のとがめの榎木屋敷」は長浜金藏という武士が、化け物が出るといふ榎木屋敷に住むという約束をして見事約束を果たし、「此屋敷にて八十余歳まで。堅固に勤めける。金藏人中の一言その義理にたがへず。爰にすましけるは。天晴れ武士の一心とぞ。世の人ほめにき。」と結ばれている。

一の五「死ば同じ波枕とや」では、荒木村重に仕える神崎式部が同役の森岡丹後の子丹三郎を託されたが、その子が大井川で亡くなったため、丹後との約束を重んじ、我が子勝三郎のみ生かしておくわけにはいかぬと水死させてしまう。

三の四「おもひもよらぬ 首途の聳入」では隼人と外記の二人が子供同士を結婚させることを約束していたが、外記が不意に打たれてしまう。外記は家族にもその約束を話していなかったが、隼人はきちんと敵討ちに出る前に外記の子龜之進と結婚させる。ここでも「兼ての約束人はしらざりしに。此時にいたつて隼人の心底を感じける。」と書かれている。

四の二「せめては振り袖着て成とも」でも室田猪之介が閉門の時に命を助けられた岡崎四平と衆道を結ぶ際に、「其年は猪之介二十二才成に。たはぶれのあまりに。廿一才と年のほど。ひとつかくされしは。武士にはなき事ながら。恋路なれば悪まれず」となっている。

四の三「恨み数読永楽通宝」では、千塚太郎右衛門と雲場茂介がある死骸を見つけたが、太郎右衛門と縁続きの者だったため隠すことにした。しかし、直後に役人の詮議が入り、茂介の密告と疑った太郎右衛門の言葉として「夜前申合せし甲斐もなく。さりととはひけう成心底。かく有べき事にはあらず。まつたくそこを立せじ」と言いかける。

以上のように『武家義理物語』の他の用例を見ると、いずれも「約束」をその章の話題の中心にすえた場合、当然のことながら、そのいずれも「約束」をお互いに果たすことなくしては話の展開が成り立っていない。むしろ例外的ともいえるのが、この三の二「約束は雪の朝食」ということになりそうである。それだからこそ、俗世の倫理を超越した隠者「約束」の在り方を伝えた話なのだという見解もある。だが、この章を「范式伝」などを典拠とし、武士としての「義理」を隠者となつても貫いた小栗と丈山の交流に中心をおいた話であるとすればするほど、やはりあの丈山の「是にて一飯かならず」と「此たびは寒空に。何としてのほり給ふぞ」の言葉の不自然さが強調されてしまう。そして、この稚拙な矛盾の理由としては、中村幸彦氏による地理的な表現の不備から代作者を想定する説が説得力を持つようであるけれども、もし仮にそうだとすると、この矛盾の原因まで、代作者西鷺の稚拙に引きつけてしまつて、はたしてよいものなのだろうか。

それでは、この矛盾を解決できる有効な「読み」の手だてはあるのか。私は、この「約束は雪の朝食」の逸話の持つ矛盾点は「茶の湯」（数寄）との関わりから見えていくことで解決できるように思う。そのためにまず、「石川丈山」と「茶の湯」との関連の深さについて検討してみることとする。

石川丈山のおもな経歴については、先にも述べたとおりである。では、石川丈山は茶人としてはどのように捉えることができるのだろうか。

丈山と茶の湯の關係についての具体的な論考としては、矢部誠一郎氏の「石川丈山と煎茶道」がある。²³この論考では、小川信庵（慶安元年・一六四八—寛保三年・一七四三）の『煎茶会法式之書』による石川丈山煎茶道始祖説を石川丈山の慶安四年（一六五二）に編まれた詩文集『覆醬集』の用例を中心に検討し、「唐風趣味の形象化」としての煎茶趣味を確認したものである。矢部氏の指摘にもあるように、小川信庵が煎茶の祖として丈山を目したのは、丈山の文人趣味に注目してのことであつたという。事実、伊藤善隆氏などの指摘にもあるように、丈山の山居のありようは大いに中国の思想に影響されていたようである。²⁴

それについて、矢部氏は丈山の煎茶趣味はあくまで近世初期の社会的流行を受けてのことで、江戸後期の文

人趣味のなかから登場する、対抹茶の意識を持った煎茶道ではないと否定的に結論づけている。そのうえで「具体的な資料を挙げえないが、抹茶道を嗜んでいたことは、既述のように当時の茶人松花堂昭乗への贈答詩や現存する丈山自作の抹茶茶碗などからも推察できる。」と茶の湯との深い関係をも指摘しているのである。私も、この指摘は正しいと思う。管見のなかからも、具体的抹茶への関与を示す器物として松浦家伝来で出光美術館蔵の「奥高麗茶碗 銘 さざれ石」を挙げることができる。内箱蓋表に銀文字で「さ／＼れ石」とあり、古筆了仲（明暦二年・一六五六—元文元年・一七三六）による「石川丈山六々山人箱蓋粉書付 銘さ／＼れ石の四文字正筆相違無之候也子十二月古筆了仲」の極札が添っていることも図録により確認できる。²⁵ また、西山松之助氏によれば、野村美術館に丈山作の「枝迹」という銘の茶杓も所蔵されているという。²⁶ また、これら二点以外にも、現存の茶器のなかに丈山にまつわるものが存在する可能性は否定できない。先の茶碗の松浦家伝来という由緒とも考えあわせると、丈山の茶の嗜好が上田秋成のような抹茶道批判をともなう煎茶一辺倒の志向ではなく、抹茶の「茶の湯」も取りこんだ広いものであった可能性が高い。

文献のうえからは、石川丈山の詩文集『覆醬集』（寛文十一年・一六七一年刊）『新編覆醬集』（延宝四年・一六七六刊）における「茶」の記載を追うことで検証できると考える。²⁷ それらについては、先の矢部氏の論文において部分的に指摘されているけれども、丈山の「茶人」としての在り方を確認するためにも、ここで再度検討してみる。

たとえば、『覆醬集』上―廿四「遊瀧本坊」では「勝概招賓友、焼香自点茶（勝概賓友を招きて、香焼きて自ら茶を点つ）」とあったり、上―十四「挽龍光ノ江月禪師」や上―廿二「丁丑九月ノ望同江月師松花翁入観瀾亭賞月時撮翁所詠倭歌ノ之末字押韻」、上―廿三「悼南山ノ松花堂」という詩もあり、松花堂昭乗（天正十一年・一五八四—寛永十六年・一六三九）や江月宗玩（天正二年・一五七四—寛永二十年・一六四三）といった茶人との交流を窺い知ることができる。また、下―四「赴大尹ノ都廳謝茗飲」という詩もあり、「懶性従来逕路通 年々茗飲被招レ公 不愁杖履家山遠」 帰袂飄然両腋風（懶性従来逕路通し 年々

茗飲公に招かる 杖履家山の遠を愁へず 帰袂飄然たり両腋の風」とあるように板倉重宗（天正十四年・一五六―明暦二年・一六五六）の茶会に招かれ出かけていた様子も窺える。こうした丈山の交流については、多田侑史氏が、

その寛永文化人グループに属する人たちの交遊範囲を調べて見ると、せまい京都の中で、それぞれのテリトリがあるのが分かります。

まず政治力を背負う幕府派の人たち。伏見奉行で大茶人で造園造邸の手腕家で、しかも一大名である小堀遠州。名司政官である板倉重宗。洛北に隠棲しながら御所を監視していたという石川丈山などまずこの派でしょう。石清水の坊官である松花堂昭乗や、豊臣大名くずれの木下長嘯子も、この派に近づくはずには生活でできなかったでしょう。光悦も内心はともかく、一応大いに気を遣って出入りを重ねていた様子です。²⁸

と推定している。

さらに、『新編覆醬集』に収められている『統覆醬集』には、利休の孫・千宗旦（天正六年・一五七八―万治元年・一六五八）の名も見られる。それは統一十「湯社宗旦匪敢有_テ素因_ニ介_ニ於人_ニ以_テ貽_ニラル_一絶_ヲ一継_テ韻_ヲ寄謝_ス」と題された詩に、

懶性無_レ縁・傾盖顧_一

市朝懸隔白雲中

雖_レ耽_一茗飲_一殊_一流俗_一

髣髴前身桑苧翁

懶性 傾盖の顧に縁無し

市朝懸隔す白雲の中

茗飲に耽ると雖ども流俗に殊なり

髣髴たり前身の桑苧翁

とも見える。この詩は、丈山が宗旦の茶会に招かれたものの、市中に出ることを拒み参会を辞退したときの詠のようである。このことを、即座に丈山の宗旦拒否に結びつけ、抹茶へ否定的姿勢があったと読むこともできるかもしれない。ただ、『覆醬集』下―廿三「題羽林重宗之所蔵呂宋真壺并蓮華壺」や下―十五にみられる「右此ノ四章依テ京尹羽林板倉重宗公之需題書ス」とある四首の「文林碾茶壺 將軍家所賜也」「賜二両壺御茶一右同事」「花瓶 右同事」「繁雪 碾茶壺俗ニ曰フ肩衝ト」というように茶道具に寄せた詩があったり、『続覆醬集』には、続八―三「茶匙筭銘」続八―四「宗伴カ花筭銘 二言」「花筭銘」という詩文もあることと、先に示したような実際の茶道具の伝来をも考えあわせてみれば、丈山が抹茶の嗜みにたいして否定的ではなかったことは明白となろう。

4 「約束は雪の朝飯」と茶の湯

「約束は雪の朝飯」が、「雪の朝」という「日本文芸の伝統」による「場」に設定されていることは、すでに笠井清氏によって指摘されている。²⁹私は加えて次にかがげる、小堀政一（天正七年・一五九七―正保四年・一六四七）による「小堀遠州書捨文」の一節との関連を指摘したい。

それ茶の湯の道として外にはなし。君父に忠孝を尽くし、家々の業を懈怠なく、ことさらに旧友の交をうしなふことなかれ。春は霞、夏は青葉がくれの郭公鳥、秋はいと淋しさまる夕の空、冬は雪の暁、いづれも茶の湯の風情ぞかし。……一飯をすゝむとても、志厚きをよしとす。多味なりとも主たる者の志薄きときは、早瀬の鮎、水底の鯉とても味あるべからず。籬の露、山路の蔦かずら、明くれこぬ人をまつ葉かげの釜の音たゆることなかれ。³⁰

この一節をながめたとき、丈山は笠井氏の言う、『拾遺集』・『和泉式部歌集』・『山家集』、そして『徒然草』といった伝統的文芸世界にとどまらず、こうした一会の風情を小栗との間に演出しようとしたのではないかという想像さえわいてくる。遠州の言う「冬は雪の暁」「志厚き」「一飯をす、む」ために「明くれこぬ人を」待ち、「まつ葉かせの釜の音たゆることな」く住まいする風流人と、この章での丈山の姿は見事に重なるからである。そうになると、小栗との約束を忘れ、「此たびは寒空に、何としてのほり給ふぞ」と言った丈山の健忘症とも思われる不自然な態度は、従来の学説のように隠者の「反俗」による「反倫理」的行動として解釈するよりも、このように茶の湯者（数寄者）の態度として捉えた方が、よりよい解釈ができるのではないかと思われる。茶の湯者の在りようの理想として、『草人木』（寛永三年・一六二六刊）に「其心は根本茶湯は隠遁者のわき也。隠遁者は物の利欲に少もかまはず、世間むさばらずして外には仁道を敬ひ、内心には実の道に人事をむねとする故に祖師先徳の遺をける金言の軸物を愛す」べきだと書かれている。その姿勢は、隠遁者ではあっても「反俗」にかこつけて「約束」、すなわち「義理」を忘れてもよしとされるものではなかったことが、ここからもわかる。にもかかわらず、丈山がすっかり「約束」を忘れたように描かれたのは、なぜなのだろう。

その根拠の一つとして、「約束は雪の朝食」の

十一月廿六日の夜降り大雪に、笥扱べき道もなければ、まだ人顔の見えぬ曙に、丈山竹箒を手づからに、心はありて心なくも、白雪に跡付て、踏石のみゆるまでとおもふ折ふし、

の部分の茶の湯との関係の深さを指摘することができよう。ここでまず、丈山が「まだ人顔の見えぬ曙」に、「笥」の水をなぜ汲もうとしたのかを考えてみる必要がある。丈山が「小栗」の来訪をすっかり忘れ、まったく気にも留めていなかったとしたならば、隠遁の生活にある丈山が、なにゆえ自分の風雅の心を曲げてまでも「人顔の見えぬ」うちに水を汲み、「踏み石の見ゆるまでは」と手づから掃除をしなくてはならなかったのだろうか。ち

なみに笠井清氏は、「せめて飲み水を汲む道だけはつけておきたく」と解しているが、私はそうした生活感と直結した解釈はかえって「閑居幽棲」の風情を壊すのではないかと考える。一方、「晨朝」の勤行のため仏に供える水を汲むためであったという仮説も成り立つであろう。しかし、そうなると、「まだ人顔の見えぬ曙」とわざわざ記し、「曙」に水を汲むような設定としたことの意味はどうなるのだろうか。それは仏事のためというよりも、むしろ『南坊録』（元禄三年・一六九〇ごろ成立か）にある、「惣テ朝・昼・夜トモニ、茶ノ水ハ晝汲タルヲ用ル也。コレ茶ノ湯者ノ心ガケニテ、晝ヨリ夜マデノ水、絶ヌヤウニ用意スルコト也……晝ノ水ハ清氣ウカブ、井華水也、茶ニ対シテ大切ノ水ナレバ、茶人ノ用心肝要也」の記述を背景に持つ茶の湯との深い関わりを持つとすべきだと思う。

さらに、裏千家四世で加賀藩に仕えた仙叟宗室（元和八年・一六六二—元禄十年・一六九七）の高弟であった臘月庵（浅野屋次郎平）の残した『茶道直指抄』（正徳六年・一七一六 三月奥書）にも、

一 上京に松本と云侘茶人有、唯独暮しければ、日々に朝くらきうち、自身柳の水を汲にまいりし、自然遅ま
いり、夜月明候へハ、流石に恥敷存候而、道に□子を捨て置候、左候へハ、人不便かりてもたせてやりしと也、
是も御物語（筆者石塚注 三齋公）也³⁴

という逸話も紹介されていることから、「人顔の見えぬ」晝に水を汲もうとしたのは、おそらく小栗をもてなすための湯を沸かそうとしてのことであったと推測できる。この茶人「松本」の話は、『細川三斎茶書』（一尾伊織〈慶長七・一六〇二—元禄二・一六六九〉自筆写本）にも見られることから、茶人の嗜みを示す話として支持されていたのであろう。「曙」の一語でも十分に意味の通る部分に、「人顔の見えぬ」と加えていたり、「曙」という字に「あかつき」とわざわざふり仮名が付してあることなどからも、この部分はこの朝の丈山の姿を、先の茶の湯の逸話が示すような茶人の姿と重なる形で、作者が創作している部分であるとは考えられないだろうか。こ

の部分で丈山が、小栗の訪問を予期し、その迎えの準備をしていたとしても不自然ではない。もし、笠井氏の言うように、たんに自分で使うためだけに水を汲むのであるならば、雪の朝のせつかくの風情を「心なく」壊してまで、水を汲む必要はなかったはずである。小栗の訪問を承知したうえで、そのもてなしのために丈山は暁から自ら水を汲み、そして露地をも自ら掃こうとしていたと考えるべきである。

小栗を迎えようとして準備していたであろうということは、「踏石のみゆるまで」という雪の掃き方からも推測ができる。それは、たとえば『利休流茶湯習法』（貞享四年・一六八七 杉木普斎清水甚左衛門宛）の「朝之茶湯習法」に、

俄に雪降には、おやまぬ先に、時分は少し早く候とも、参りてよし、亭主も其心得はあるべし。客来る時、亭主迎にくゞりにてもさほりにても出る時は、竹箒にて飛石をはきく出ることもあるべし。兎角、茶の湯は皆時に臨みての働きを上手といふなるべし。³⁶

とあったり、『細川茶湯之書』（寛文八年・一六六八刊）に、

一、雪の朝のさうじの事、飛石の上ノ雪、石段の雪ハかりをはきて取、其外の所は、少も雪にあとのつかぬ様に可仕也。³⁷

と見られる作法と丈山の掃き方が通じているからである。さらに、『古田織部正殿問書』（寛文六年・一六六六九月奥書）にも、

四——内外ノ路次雪降候時分掃除心得之事。取テ能所ニ払取テ数寄出シ候ニ会席之中茶ノ中掃除シタル上へ、

雪少々降テ溜候ハ不払共不苦。是モ道通ノ分踏石ノ雪ハ払取ヘシ。³⁸

十四——初雪数寄之事。雪ヲ賞シテ出ス心得也。三寸、四・五寸計雪積ニハ路次中其儘置テ吉、四・五寸ヨリ多ク候ト其儘置ハ無掃除成也。道通石旦之上ハ成程払掃キ清ムヘシ、³⁹

とも書かれている。これらと比較したとき、丈山の雪の朝の「心はありて心なくも」踏み石の上を掃いた掃除の在り方は、茶の湯の雪の朝の作法と応じた行動であったことがわかるであろう。

それでは、丈三のこうした茶の湯の作法を背景とした小栗を迎えるための「働き」と、その後実際に小栗と対したときに「約束を忘れていた」と述べることは、いったいどのように結びつくのであろうか。私は、たとえば『宗春翁茶湯聞書』（慶長五年・一六〇〇 三月奥書）にある

夫、茶湯は色々習ひ有といへ共、第一、作意肝要なり、いかに物を知テモ、無作意の数寄は堅ク、心転スル事なく、おもしろからず、是を他流と云。⁴⁰

の部分や、『山上宗二記』（天正十八年・一五九〇ごろ）の「総て茶湯二作ヲスルト云ハ、第一、会席、又、暁二客ヲ呼カ、ヲシカケテ来ルカ」という部分に見られる、茶の湯の「作意」という概念によって説明がつくと考え。すなわち、丈山のこの朝の不自然な言動は、熊倉功夫氏の指摘する、

茶会は主客のはたらきによって、思いがけない展開をみせる。亭主の心の動きにあわせて客のはたらきがうまれる。両者のはたらきがぴったり合ったときに名茶会ができあがる。前もって予測しえないところに茶の面白さがあるという。これはハプニングに近い。しかしその茶会も、演出が全くないところには、はたらかきうまれるはずがない。茶会の前提には亭主の演出がある。これが趣向である。……極端ないいかたをすれ

ば、テーマを芸能化する工夫、これが趣向である。秦恒平氏によると、趣向は人工的人為的なものであるけれども、いかにも自然にみえるようにくまなければならぬという（『趣向と自然』）、石州の言葉でいえば「さびたるはよし、さばしたるはあしし」ということだ。しかし、逆に趣向は人為的であればあるほど面白い。趣向は意外性と表裏をなしているからである。⁴²

ということと通じていると考えるべきだと思う。そして、こうした考え方は、たとえば熊倉氏も引用する、元禄時代の茶風をよく伝えるとされる『石州三百ヶ条』（元文三年・一七三八 以前の成立）九十六「茶湯さひたるハよし、さはしたるハあしき事」の

……さひたるは自然の道理也、さハしたるハ拵ものなり、ことたらぬをさひたると云こゝろに、万事七八分にする事肝要也。⁴³

という部分や、『南方録』に付随している立花実山の「壺中炉談」（元禄十三年・一七〇〇）にある、

録（筆者石塚注 南方録）に云、客・亭主たがひに心かなひたるハよし、かなひたがるハあし、と云々、⁴⁴

といった背景を持つと思われる。

『雪の朝』がそうした「作意」の發揮される場としてふさわしいとされていたことは、後にも引用する『茶話指月集』（元禄十四年・一七〇二）の語り手でもあり、宗旦四天王の一人に数えられた茶人藤村庸軒（慶長十八年・一六一三—元禄十二年・一六九九）の茶書で、樋口成房（明和元年・一七六四—文化元年・一八〇四）が書写した伝書に

一 会席当座ニ出来候品ニて出すへし、兼て致候品ハ遣ひ不申候

とあつたり、

一 雪の茶事ハ、兼て案内及はす、先臨時の事なるへし、或ハ口切ニ毎も可招客人差支共有之、招不申候内、彼是時節及寒天之比、亭主彼ノ客人へ面会之砌、扱雪降候ハ、一服可進候間、准々被仰合御出候様、約束いたし置候事なるへし、亭主より案内無候事とは申せ共、亭主より噂もなきニ参候てハ、いか、成るへし、右口切茶事ニ間違客参り不申候共、客人より雪茶事可被招など、申事にてハなし、風と申入、亭主も其意にて有レは、互ニ随喜いたし面白くも候へ共、若亭主意内当り不申候時ハ、却て不興之趣意ニ成て、あしかるへし、又亭主より粗沙汰なきニ、推参いたし候ては、風与何之覚悟も無候時ハ、却て亭主ヲこまらす趣意に成て、面白からず候、しかし夫も亭主至て数寄ニて、常釜の事ハ勿論申ニ不及、雪といへハいつとても茶湯の用意可有之程の数寄人なら、案内なく共推参いたしてよし、扱又口切ニ参り、又雪の茶に参候ハ、不面白候、しかし是も露地の様子ニより又参りてもよし。⁴⁵

とも書かれていることからわかる。とくに庸軒の雪の朝茶事のもてなしの理想と、「約束は雪の朝飯」の丈山のもてなしぶりとは大変よく似ていると言える。とくに「雪の朝」にはかねての「約束」さえあれば、不意に訪れ茶の湯を請うて一向に構わないという点である。「風と申入、亭主も其意にて有レは、互ニ随喜いたし面白くも候へ」という趣向は、「約束は雪の朝飯」と大いに通ずる点がある。このように見えてくると、「約束は雪の朝飯」での丈山のもてなしぶりの背景には、こうした茶の湯の「作意」が潜んでいたと解するの、それほど無理がないように思われる。たしかに、丈山と小栗の二人は「朝飯」の約束をしたに過ぎず、茶事の約束をしたわけではない。そのため、あまり茶の湯と引きつけてしまう捉え方には、牽強付会ではないかとの反論も当然あろう。し

かし、後の「木の葉焼付」け、「柚子味噌ばかりの膳」を出す部分にしても、丈山自身の「然らば廿七日は我が心ざしの日なれば。是にて一飯かならず」との「約束」からすれば、あまりに粗末なもてなしぶりであることを考えたとき、それらの部分にもまた、茶の湯との深い関連が指摘できるとしたならばどうであろうか。

まず、「柚味噌ばかりの膳」を小栗に供した点である。これは丈山が小栗との「約束」を忘れていたため、とつさに用意した「粗飯」であることを、「柚味噌」によって示すそうとしたにすぎないという見方もできる。しかし、とつさにしつらえた膳が「柚味噌ばかりの膳」でなくてはならない必然性は、はたしてどこまであるのだろうか。笠井清氏はそのことについて、「この朝飯に出したのが『柚味噌ばかりの膳』であつたのも、いかにも心憎いが⁴⁶と述べてはいるものの、その背景については言及していない。市川光彦氏も、この「シーン」は「丈山手ずからの食事仕度である。西鶴描く丈山庵には、ふしぎに人の気配がない。これが雰囲気づくりに奏効している⁴⁷」と述べてはいるものの、その「柚味噌」である必然性については説いていない。その当日は、丈山の言葉を借りれば「心ざし」の日である。とするならば、精進料理であつたにせよ、相応の料理の準備はあつてしかるべきであつたろう。そう考えたとき、藤村庸軒が伝える茶の湯の逸話を、娘婿の久須美疎庵（寛永十三年・一六三六―享保十三年・一七二八）が筆記した『茶話指月集』（元禄十四年刊）に載る「柚味噌」にまつわる次の逸話が興味深いものとなつてくる。

森口といふ所にひとりの侘あり。利休としる人なりければ、いっそ茶をたへんと約す。ある冬のころ、大坂より京へのほるに、かの侘をこゝろさし、夜ふかに出て尋たれば、亭主よろこび迎へ、休内に入ル、栖居いとわひて心になかふ、やゝありて、窓のもとに人の音なひしけるを、これハ亭主行灯に竹竿を持そへ出て、柚の樹のしたに行灯をおろし、竿にて柚を二つばかりとりて内に入ぬ、休打ミるより、是を一種の調業にしつるよと、侘のもてなし一キハおもしろく思ふに、あんのことく柚味噌にしたゝめて出す、酒一献過て、大坂より到来すとて、ふくよかなる肉餅を引ク、休さてハよべよりしらするものありて、肴もとゝのへ侍るにこそ、始め

わさとならぬ体にミせつるハ、作りものよと興さめて、酒いまたなかばなるに、京に用事あれハまかるとて、いかにとむれとも聞も入レすのほりぬ、されハ、侘てハ、有合たりとも、にけなき物は出ぬがよきなり、⁴⁸

残念なことに、この逸話が出版され人々の前に示されたのは、元禄十四年に至つてのことであるから、『武家義理物語』の読者たちに広く知られていた話とするには問題が残る。それを根拠として、茶の湯との関連を指摘する根拠とすることは疑問とする見方も出てこよう。しかし、この「柚味噌」の逸話は、はやく『宗春翁茶湯聞書』（慶長五年三月奥書）にも、

一 不時の数寄の習在之。下手、上手相見え候。心意肝要也。（中略）俄二□ぬ物のかまほこなどわ不出も
の也。会ノ前二薄茶をもたて、咽のかわきやめ、扱、炭置会尤候也。乍去、腹中次第也。⁴⁹

とあることから、茶の湯のもてなしの嗜みとしては広く知られていたと推察できるのである。また、筒井絃一氏によれば、『烏鼠集』（慶長年間 一五九六—一六一五 成立）に「不時に来たれる人にかねて用意のかまほこ、きそく、かうたて、手まの入たるもり物など不可取出」とあるようであるから、この献立は茶人の即興の料理としてには理にかなっていると言ふことになる。このように見ると、「柚味噌」の膳を供するということは、森口の侘び茶人の逸話も示すように、即興の「作意」を示す趣向につながっている献立だったと理解できるのではないだろうか。そう考えると、先の「暁の水」といい、「雪の掃き方」といい、この「柚味噌ばかりの膳」の供し方という。雪中で実際に丈山が柚子を採るなどありえないけれども、たんなる粗飯を述べるためだけの設定とは考えにくいと思う。「柚味噌ばかりの膳」を小栗に供したことには、きちんとした背景があるといえるのである。

ちなみに『南方録』二「会」には、

「十月廿九日、朝、但紹鷗ノ忌日也」という会記があり、

△汁 ミソヤキ

△葛豆腐・ゴボウ

△柚ミソ

△菓子

フノヤキ・川茸

⁵¹

という献立になっている。『南方録』二「会」を天正期の史料することについては、成立時期の不確実さから疑問の声も多いが、すくなくとも元禄期ごろの侘びた茶の湯者の献立にたいする意識を反映した史料として見ることは可能であろう。その日付は、「十月」となっているものの、元禄時代の茶道評論家ともいべき遠藤元閑（生没年未詳）の書いた『茶之湯六宗匠伝記』（元禄十五年・一七〇三）に、「紹鷗の死去ハ弘治元年十一月廿九日也元禄十五年迄百四十八年に成る」とあることから、「紹鷗忌」が元禄時代には「十一月」と広く解されていることが窺える。となると、「十一月」末の献立に「柚味噌」が供されているのは、もしかすると紹鷗忌を意識してのことであつたのかもしれない。ただし、現時点では他例を見ないので、ここでは事実を指摘するにとどめておく。このように見てくると、丈山の用意した「柚味噌ばかりの膳」が、「即興性」を感じさせる献立であつたと同時に、「侘び」茶の風情を十分に醸し出した茶懷石の献立を思わせる膳であつたことも推測できるわけがある。

また、丈山が「木葉焼付」け朝飯の支度をしたことについても、『十三冊本宗和流茶湯伝書』（十七世紀後半成立）にある次の部分と関連が深いと思われる。

一 侘はよし、侘たるは悪しいふ事、万事心得可有之事也。常々工夫肝要也。

一 昔へちくわんと云者有。へち、茶の上手なり。紅葉を花にいけ、その葉の散りたるをはきよせ、かますへに用也。囲炉裏を三角に仕も同作人也。惣別へちと云事、本道をよく知り尽し、数寄の道は難成ときわめわ

きまへたる物などの可仕。殊の外作の人事也。本道をませてハへちにてハ無之也。縦俳諧の下手は真句の悪
 をすることく也。⁵³

この話の「へちくわん」とは、北野大茶の湯で評判をとった侘び茶人、貫（生没年未詳）のことであり、彼が炭ではなく「木葉」を焚いて茶の湯を沸かそうとしたところに、その趣向が見られるわけである。一方、丈山については、ただたんに貧しさを言うための設定ではなかったのかという見方でもできるかもしれない。だが、その貧しさが実際であったのか、それとも演出であったのかという点について言えば、彼の経歴や詩仙堂での暮らしを考えたととき、炊事の薪も得られないほど貧しかったとは考えがたい。その点については、市川光彦氏が『近代艶隠者』を引いての「家童」の存在の指摘も補強となると思う。つまり、この部分も「侘び」の趣向を醸し出した部分として考えるべきではなからうか。

では、そこまで茶事を意識しながら、丈山が小栗に茶を供していないのはなぜかという疑問もわいてこよう。たしかに、先にも引いた『宗春翁茶湯聞書』（慶長五年三月奥書）には、「会ノ前ニ薄茶をもたて、咽のかわきやめ、扱、炭置会尤候也。乍去、腹中次第也」⁵⁵とあるように、とりあえず到着の客に薄茶を点てて供する作法のあったことも事実である。それなのに清談にふけり、「朝飯」まで何も小栗に供していない丈山のもてなしぶりに、茶の湯の意識など、むしろなかったのではないかという反論もできるかもしれない。だが、一方に次のような作法もあったことが指摘できる。松屋久重（永禄九年・一五六六―慶安五年・一六五二）の書いた『茶道四祖伝書』（正保四年・一六四七―慶安五年・一六五二ごろ成立）に収められている『三斎公伝書全』には、朝茶の心得の一つとして、

洞庫ノ有之座敷ニてハ……又亭主より客へ、料理ハ静ニ申付候。其間ニ先薄茶一服可申と云事も有之故ナリ。又朝ハ飯以前ニ茶吞事ハ無之、夫故茶碗茶具出て不置。⁵⁶

とあって、「飯」以前に茶を出すことを否定している。また、松本見休（生没年未詳）が書き残した『咄覚集』（宝永七年・一七一〇序）に「宝永三年戊七月」のこととして、

一、此案内者四条道場に閑居したる遁世者同道して帰るさに庵に立ちよりて一服給よとす、められまいりしに……扱もくも侘たる為体肝に絶たり、床に向へば雛屋立圃自画自賛の掛物風炉ハ飯釜の割たるに雲龍釜掛ルしはし有りて茶菓子盆に隈笹の葉を敷て焼飯やき味噌出候て、⁵⁷

とあることから、とくに侘びの茶の場合、茶菓子の代わりに「飯」を供することがあったことも窺える。実際、この時代の茶の湯で供された菓子は、「栗」や「ふのやき」といった、今日の「甘味」の茶菓子とは遠いものであった。

こうして、丈山によって用意された侘びの膳を、小栗は「喰仕廻て。其箸も下に置きあへず」立ち去っていく。山田宗徧（寛永四年・一六二七—宝永五年・一七〇八）の『茶道要録』（元禄四年・一六九一刊）下巻第十三「飯膳之事」によれば、

酷ダ侘タル時ノ一汁一菜ニ汁椀ヲ飯椀ニ重テ即チ飯椀所ニ置キ膳ノ向一ツ有器ヲ右ノ隅汁椀所ノ向ニ置キ箸先ヲ其ニツノ間ヘ指入本ノ方膳ノ縁ヲ外シテ寄筋違ニ置ナリ常ハ縁ニ掛テ返スベシ⁵⁸

とあるから、ことによると「其箸も下に置きあへず」の部分も茶事の懷石の作法を踏まえているのかもしれない。このように小栗は茶事の初座の席をそこそこに立ち帰っていくわけである。だからこそ、茶が供されるにまで至らなかったと考えられるのである。

5 おわりに

「約束は雪の朝飯」の作品の内部に見られる矛盾点を茶の湯の趣向と照らして考えてみた。もともと、この章は小栗の「義理」の話であり、丈山は作品内部で一貫した人間性は持たされていなくとも話の展開のうえから一向に構わないのではないかという解釈も成り立つ。事実、丈山の発言は、訪問の前には、「是にて一飯かならず」とまで言いながら、当日になり「何としてのぼり給ふか」と失念し、最後には自分で「かりそめに申かはせし」と述べている。その矛盾を、「超俗」の隠者や老人にありがちな「物忘れ」として、文芸と別の問題として処理してしまえばそれまでのことかもしれない。しかし、それならば、なぜ石川丈山という実名まで挙げて、この章は書かれなくてはならなかったのだろうか。当時の通世者の象徴的存在であった丈山の実名を使う必然性がどこにあったのかを考えると、そこには何らかの記号的意味づけがあったからと考えるのが自然であろう。これまでの解釈では、それを「超俗」の象徴として捉えていた。今回、私はそこに「茶人」としての意味づけを加味してみた。この話を「雪の朝」の茶の湯の趣向にのっとった小栗との再会の話として見直してみると、これまでは、矛盾として考えられていた丈山の発言も、あながち矛盾ではないことが検証できたと思う。

「雪の朝」の趣向を持った話としては、『好色一代男』の巻七の一「其面影は雪むかし」の高橋にもあることは以前に指摘したとおりである。丈山のこの逸話も高橋の逸話と同じように茶の湯の作法に照らしたとき、発想として「侘び茶」の雪の朝の趣向を追求したものといえる。とするならば、これらの話は小林幸夫氏が「数寄雑談とは、世間雑談に対置される、俗を排したいわば風雅なる咄」と定義し、

利休流の侘数寄の茶湯が、世間雑談を排除し、数寄雑談を茶人・茶器の評判に制限したことは、日常性とは切れたところに茶湯の一座建立（談笑性・対座性）を、求めたということであろう。⁶⁰

と指摘するような数寄の話として捉えられるかもしれない。そして、その一部が西鶴の文芸に取りこまれていったという過程も想定できるかもしれない。茶の湯の場面は直接描かれていないにせよ、「約束は雪の朝食」の逸話は、茶席で茶人石川丈山の「雪の朝」の趣向のある話として語られるには、まことに似つかわしい話ではなかったろうか。もし、丈山のここでのありようを「超俗」とするならば、むしろ「侘び数寄」という点からそう見るべきであろう。つまり、石川丈山の茶人としての一面をよく伝えている話であったからこそ、石川丈山の名前を实名で出したことに意味があったとはいえないだろうか。残念ながら、明確な典拠となるような石川丈山にまつわる茶の湯の逸話を示すことは、今回かなわなかった。しかし、この「約束は雪の朝食」と茶の湯とは深い関わりがあるということは、他の茶の湯に関する資料からでも、十分に検証できたと考える。そして、そのことで、この章における不自然とされてきた丈山の言動も、一貫性を持って「読め」るようになったと考える。すなわち、従来の典拠論では、もっとも不可思議な展開であった「約束」の失念や粗末なもてなしの在り方も、茶の湯の逸話・数寄雑談という新しい側面から眺めたとき、さほど違和感なく「読める」ようになったのではないかということなのである。

〈注〉

- 1 江本裕「西鶴武家物についての一考察」『国文学研究』第31集 早稲田大学国文学会 昭和四一・十 七三頁
- 2 本文は吉田幸一解説『武家義理物語』第二期近世文学資料類従西鶴編10 勉誠社 昭和五〇・十一により、「」は適宜付した。
- 3 江本裕・谷脇理史編『西鶴事典』おうふう 平成八・十二 七七五頁
- 4 南方熊楠『南方熊楠全集』第五巻 平凡社 昭和四七・十一 一九六一―一九七頁（初出 昭和八年五月 『月刊日本及日本人』二七三号）
- 5 笠井清「西鶴の剪燈新話系説話」『西鶴研究』第九号 昭和三一 六二―七七頁

- 6 早川光三郎『滋賀大学文学部紀要』第三号 滋賀大学文学部 一九五四
- 7 金井寅之助『約束は雪の朝飯』の背景」野間光辰編『西鶴論叢』中央公論社 昭和五十・九 三七七—四〇四頁
- 8 田中邦夫『武家義理物語』にあらわれた西鶴の町人思考』大阪経大論集第一三四号 昭和五五・三 二三六—二五八頁
- 9 笠井清「詩仙堂の文芸—西鶴の『約束は雪の朝飯』を中心に—」『俳文芸と背景』明治書院 昭和五六・六 六一—四七頁
- 10 市川光彦「西鶴のなかの丈山—西鶴における自由とその周辺、第二」『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』名古屋大学国語国文学会 昭和五九・四 四一—四二八頁
- 11 ここでの「典拠」の検討については、杉本好伸氏の「死出の旅行約束の馬」考『文教國文学』第三八・三九合併号 平成十・三 二〇—三三頁に導かれたところが大きい。
- 12 源了圓『義理と人情』中公新書一九一 中央公論社 昭和四四・六 八六—八七頁
- 15 上野洋三 注『江戸詩人選集』第一巻 岩波書店 一九九一・八 三四六—三七六頁
- 16 小川武彦『石川丈山年譜 本編』青裳堂書店 平成六・九
- 17 谷脇理史「自主規制とカムフラージュ」『文学語学』一五四 全国大学国語国文学会 一九九六・一一 四五頁
- 18 小川武彦『石川丈山年譜 本編』青裳堂書店 平成六・九 四五—四五二頁
- 19 石川順之『詩仙堂』淡交社 一九九五・一 七六—七八頁
- 20 宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』東洋文庫二〇二 平凡社 一九七二・一 二六四頁
- 21 矢野公和『武家物の西鶴』浅野晃ほか『講座元禄の文学』第二巻 勉誠社 平成四・六 六七頁
- 22 中村幸彦「編輯者西鶴の一面」野間光辰編『西鶴論叢』中央公論社 昭和五十・九 三〇—三一頁
- 23 矢部誠一郎「石川丈山と煎茶道」『國學院雜誌』昭和四四・七 二五—三四頁
- 24 伊藤善隆「近世初期における『遵生八牋』受容—丈山・三竹・読耕斎を中心として—」『近世文芸研究と評論』第54号 平成十・六 一—十四頁
- 25 出光美術館「館蔵 茶の湯の美」作品46解説 平成九・十 一二四頁
- 26 西山松之助『茶杓百選』淡交社 一九九一・三 一五六—一五七頁
- 27 『覆醬集』（寛文十一年・一六七刊）の本文は筑波大学図書館蔵本を、『新編覆醬集』（延宝四年・一六七六刊）については国立国会図書館蔵本を使用した。
- 28 多田侑史「公家まじり—寛永文化人の交流」『数寄—茶の湯の周辺—』角川選書一六三 昭和六〇・七 一八八頁

- 37 43 千宗室編『茶道古典全集』第十一卷 淡交社 昭和五二・九 一三七頁・二三二頁・二三二頁
 井口海仙ほか『茶道全集』第十二卷 創元社 昭和十一・十一 二九八―二九九頁
 44 51 千宗室編『茶道古典全集』第四卷 淡交社 昭和五二・九 八頁・四二〇頁・二三頁
 金沢市立図書館蔵稼堂文庫『茶道直指抄』の本文は国文学研究資料館マイクロフィルム二七四―三五―五によった。
 橋本博編『茶道古典集成（茶道大鑑）』大学堂書店 昭和八年初版・四八年再版 下巻 三九頁
 桑田忠親編『新修茶道全集』第九卷 春秋社 昭和三一・九 三七一頁
 39 市野千鶴子校訂『古田織部茶書一』思文閣 昭和五一・五 一二七頁・二〇〇頁
 49 55 桑田忠親編『新修茶道全集』第九卷 春秋社 昭和三一・九 二三七頁
 千宗室編『茶道古典全集』第六卷 淡交社 昭和五二・九 九三頁
 熊倉功夫『茶の湯』教育社歴史新書八一 一九七七・一〇 一一三頁
 樋口家編『庸軒の茶 茶書茶会記』河原書房 平成十・五 二九五頁・二九六頁
 48 千宗室編『茶道古典全集』第十卷 淡交社 昭和五二・九 二〇五―二〇六頁
 筒井絃一『千利休の懐石 その三』『淡交』一九九六・八月号 淡交社 八九頁
 遠藤元閑『茶之湯六宗匠伝記』の本文は国文学研究資料館マイクロフィルム（森文庫）によった。
 52 谷晃校訂『金森宗和茶書』平成九・八 思文閣出版 一四二頁
 53 松山吟松庵校訂・熊倉功夫補訂『茶道四祖伝書』思文閣 昭和四九・四 二三五頁
 56 松本見休『咄覚集』の本文は名古屋市立蓬左文庫マイクロフィルムによった。
 57 山田宗偏『茶道要録』の本文は国文学研究資料館マイクロフィルム（麗沢大学図書館蔵）によった。
 58 石塚修『好色一代男』の登場人物にみる西鶴の表現方法
 59 『文藝言語研究 文藝篇』31 筑波大学文芸・言語学系 一九九七・三 一一七―一四〇頁
 60 小林幸夫『咄・雑談の伝承世界―近世説話の成立―』三弥井書店 平成八・六 四六・五一頁

附記 本稿は、平成十年度筑波大学学内プロジェクト奨励研究「井原西鶴作品と近世茶の湯資料との関連について」の成果によるものである。